シンポジウム

ヒトラーが『最期の12日間』から『帰ってきた』わけ

高橋秀寿

1　ヒトラーと戦後ドイツ人

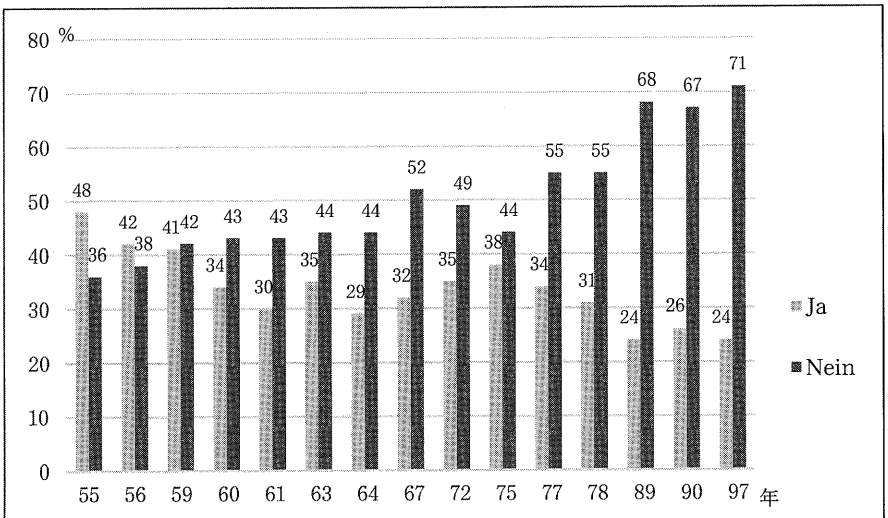
ミッチャーリヒ夫妻が1967年に公表した「追悼することの不能 „Die Unfähigkeit zu trauern“」論は，「ポスト・ヒトラー」のドイツ人の精神分析として今日でもドイツで高い評価を受けている。第三帝国のドイツ人はアドルフ・ヒトラーを自我理想に代替させ，彼の価値が自己のものとなり，彼が「集団的自我理想」を表象していたのだが，ドイツ人はその愛の対象を失うことで，メランコリックな「自我貧困化」に陥り，戦後ドイツ人は「ナチの過去に対する防御規制」を構築していったのだという。つまり，過去への心理的エネルギーの充当を撤回することで，過去との情緒的な架橋を断ち切り，その過去を否認することで，現実感を喪失してしまった。また，かつてヒトラーに充当されていた心的エネルギーは「復興」に注入されたが，この「復興に向けての激しい集団的な努力」は「罪の重々しい責任を認識すること」から逃れるための「躁病的な取り消し」だったのだという(1)。ミッチャーリヒ夫妻のこの分析は，西ドイツ人が「過去」を克服できない原因をナチズムと復興を担った世代の過去と現在から解明することで，その世代全体の責任を追及する根拠を「68年」以降の世代に提供することになった。それゆえに，この論文は戦後ドイツで高い評価を受け，影響力をもちえたといえる。

ミッチャーリヒ夫妻の議論が戦後のドイツ人の精神状態を適切に捉えているかという問題に関しては，もちろん異論も多い(2)。しかし，ともかくもこの論文とその評価は，西ドイツ人にとってヒトラーの存在が厄介なものであることを物語っていることはたしかだ。過去の歴史的人物としてかつての支配者と適切な距離を保ちつづけることができずに，その心理的な影響力が死後も長らく及んでいることがここで示されているからである。もちろん自国史の歴史的人物が死後も影響力をもちつづけることは珍しいことではない。しかしドイツの場合，その歴史的人物は第二次世界大戦とホロコーストの首謀者という20世紀最悪の独裁者であっただけではなく，西ドイツ国家の歴史的正統性（民主主義，自由主義，反独裁，反全体主義，開かれた資本主義的市場経済）がこの人物が構築した体制の全面的な

（1）　Alexander und Margarete Mitscherlich, Die Unfähigkeit zu trauern. Grundlagen kollektiven Verhaltens, München, 18. Aufl., 2004.

（2）　この「抑圧テーゼ」に対するもっとも説得的な反論として，Hermann Lübbe, Der Nationalsozialismus im deutschen Nachkriegsbewußtsein, *Historische Zeitschrift,* Bd. 236, 1983. さらに拙稿「「植民地忘却」と「ホロコースト忘却」」『立命館国際言語文化研究』19巻1号，（2007年）を参照。

否定にもとづいていたため，死後も影響力を保持しつづけていることはその国家と社会にとって看過できない重大かつ深刻な問題であった。



図表1

ヒトラーが戦後ドイツに影響力を残しつづけたことは，アレンスバッハ世論研究所が「戦争がなかったら，ヒトラーはもっとも偉大なドイツ政治家の一人だったと言えますか」という問いが戦後長らくつづけられたことで統計結果（図表1[(3)]）でも示されている。反ヒトラーと反ナチスを標榜しているこの国では人目をはばかることなくJaと公言しにくいはずのこの問いに，50年代末までそう答える割合のほうがNeinよりも高く，70年代までその割合は3割をほぼこえていたのである。ミッチャーリヒ夫妻はこの問題を「追悼＝Trauer」することが「不能」であったことに求めているが，ほんらい「追悼」は近親者の死に対する精神的な苦痛を意味し，このような喪失の現実を受け入れ，その苦痛を克服する過程は「喪の作業＝Trauerarbeit」とよばれている。これらは日本語ではなじみの薄い概念であるので，仏教用語を用いたほうが理解しやすいかもしれない。つまり，かつては熱狂したこの人物がこの世にさまよわないように，「弔い」によって「成仏」させることが「不能」であったことが，ヒトラーが「偉大」なものとして戦後に想起される，つまり「化けて出てくる」現象として理解されるであろう。たしかにこの独裁者に「成仏」の概念を使うことは不謹慎かもしれないが，すでに「過去」のものとして「現在」と適切な距離感をもって「付き合う」ことがで

(3) Elisabeth Noelle-Neumann / Renate Köcher (Hrsg.), *Allensbacher Jahrbuch der Demoskopie 1993 - 1997,* Band 10, München 1997, S. 514.

きて，「現在」にとって不適切に蘇ることがない状態として「成仏」を理解していただきたい。

では，何が「偉大」であると評価されて「化けて出てきた」のであろうか。アレンスバッハ世論研究所はナチズムの「よい側面」および「悪い側面」とみなされている項目も調査しているが，1951年11月の調査で「悪い側面」としてあげられているのは「人種政策，ユダヤ人迫害」(30%)，「自由の喪失，独裁」(29%)，「戦争の準備，再軍備，戦争」(26%)，「暴力，残酷行為，強制収容所」(17%)，「信仰の自由の喪失，教会迫害」(16%)，「外交政策，帝国主義」(11%)，「ナチ党の独占的地位」(6%) といった戦争と独裁に関する項目である。これに対して「職業機会，生活水準」(46%)，「社会福祉」(38%)，「組織，規律，安全」(10%)，「青年教育，労働奉仕，ヒトラー・ユーゲント，青年の肉体訓練」(9%)，「統制された健全な経済政策」(9%)，「アウトバーンのような大規模な建設事業」(6%) が「よい側面」，すなわちヒトラーが「偉大」な政治家である所以である。この善悪ランキングで，ナチズムに肯定的な者と否定的な者とのあいだに目立った相違はない(4)。つまり，人種主義的迫害や独裁，戦争などの政治的側面には否定的な判定が下されている一方で，ナチ党員の特権的待遇に不満が抱かれつつも，ナチズムの経済・社会政策的な側面は高く評価され，教育・訓育・規律的措置も肯定されているのである。

この世論調査で「よい側面」とみなされている項目から判断すると，西ドイツ人の多くにとってヒトラーとナチ体制とは，資本主義的な近代社会と国民国家であれば多かれ少なかれ直面せざるを得なかった危機的現象——失業，貧困，貧富の格差，社会問題と社会不安——を克服し，その社会と国家が機能する前提——業績原理，社会的安全，国民の，とくに青少年の規律化——を取り戻した体制であったといえよう。換言すれば，多くの西ドイツ人の記憶のなかでナチズムとは，資本主義的な近代社会と国民国家が陥った危機に対して全体主義的な解決を試み，その実現を国民に実感させることに成功できた体制であり，もし「戦争がなければ」その成功はつづいたであろうと悔やまれる存在だった。戦後にヒトラーが「化けて出てくる」のは，戦後体制も同様に危機に直面するなかで，ナチスの全体主義的な解決の試みが「よい側面」として記憶に焼きついていたからだといえる。

その実例として，1965年夏から都市の中心部や公園を宿泊しながら徘徊した「ガムラー（Gammler)」と呼ばれる若者集団とそれをめぐる現象を取り上げてみよう。動詞の「ガメルン（gammeln＝のらくら暮らす)」に由来するこの名称は，この集団がメディアによって大きく取り上げられ，翌年にペーター・フライシュ

（4） Richard L. Merritt, Digesting the past. Views of National Socialism in semi-sovereign Germany, *Societas,* 7 (Spring), 1977, P. 97-98.

マン監督によってドキュメンタリー映画『ガムラーの秋』が公開されると，流行語として人口に膾炙することになり，ガムラーは一種の社会現象となったのである。この集団は当時の15～25歳人口の0.1%にも満たない割合の青少年から構成されたが，それにもかかわらずこの現象が大きく注目されることになった最大の理由は，ガムラーの独自の容姿と行動様式にあった。すなわち，髪をぼさぼさに伸ばし，手入れすることなく髭を生やし，パーカーや擦り切れたジーンズのような意図的に身だしなみを乱した服装を身につけ，投げやりな態度で都市の公共空間で「ガメルン」し，ヒッチハイクなどで国境をこえて移動するその神出鬼没の姿は，当時の社会にはきわめて奇異に映ったのである(5)。多くの市民の神経を何よりも逆なでしたのは，この人びとには常軌を逸しているかのように感じられたガムラーの無為と怠惰の行動様式であった。市民社会において無為と怠惰はほんらい，労働時間とは厳密に区分されるべき余暇においてのみ許される行動であるはずだった。しかしガムラーはその区分を知らず，余暇時間でのみ許される無為と怠惰の行動様式を全生活に拡大させたのである。その意味でガムラーは市民的な「規則正しい生活」の基準そのものを拒否していた。そして，このようなライフ・スタイルを目の当たりにして多くの人びとは，ガムラーが挑んだ価値観を厳格に遵守し，その違反者に厳罰を与えた体制とその施設を思い起こすことになった。たとえば，『ガムラーの秋』では「ヒトラーがいたときにはこんなやつらはいなかった」，「おまえたちは強制収容所に入っちまいな」，「おまえたちはガス殺にふさわしい」という発言がガムラーに投げつけられ，『フランクフルト一般新聞』でもこの問題に関して「アドルフのようなやつがいたときには秩序があった。強制労働施設，一言でいえば，強制労働施設だ」という発言が紹介されている(6) このようなまなざしを注いだ人びとにとってガムラーはナチスが強制収容所で人間類型として用いた「反社会分子」にほかならず，その身体と態度が国民共同体に属することは許容されなかった。世論調査の質問に56%の西ドイツ市民が「規則正しい労働」をガムラーに強制することに賛成していたのである(7)。

2　国民的な歴史的主体としての能動的犠牲者の連続性

以上のように，戦後ドイツがヒトラーを「成仏」させることができなかった要因は，戦後西ドイツが第三帝国と類似した資本主義的な近代社会と国民国家であ

(5)　Tina Gotthardt, *Abkehr von der Wohlstandsgesellschaft. Gammler in den 60er Jahren der BRD,* Berlin, 2007, S. 32. ; M. F., „Keine Toleranz für Gammler?“ Deutsche Jugend, 1968 / 6. ; Detlef Siegfried, *Time is on my side. Konsum und Politik in der westdeutschen Jugendkultur der 60er Jahre,* Göttingen, 2006, S. 400-413.

(6)　Wilhelm Genazino, „Die Sache Adolf“, *Frankfurter Allgemeine Zeitung,* 12. 10. 1967.

(7)　Gotthardt, *Abkehr von der Wohlstandsgesellschaft,* S. 54. ; M. F., „Keine Toleranz für Gammler?“ *Deutsche Jugend,* 1968 / 6.

り，ナチ体制がその社会と国家の危機に対して強力な処方箋をもっていたとみなされたことにあった。しかし，この問題を考察していくためにもう一つの要因を考察してみたい。それは，第三帝国と西ドイツが能動的犠牲者（sacrifice）という同じ国民的な歴史的主体像をもちあわせたことである。

周知のように日本語とドイツ語の「犠牲者＝Opfer」概念は英語や仏語では二つに区分される意味を内包している。一つが能動的な犠牲者としての“sacrifice”であり，これは祖国のために戦った戦没者のように，（戦争）暴力を行使して身体と生命を捧げた，あるいは肉体的・物質的・精神的な損害を自ら引き受けた犠牲者を意味する。もう一つは受動的な犠牲者としての“victim”であり，それは自爆テロの犠牲者のように（戦争）暴力を行使されて，命を奪われた，あるいは肉体的・物質的・精神的な損害を受けた犠牲者である。前者の場合の死は歴史的使命のための犠牲として必然性を帯び，意味を与えられるが，後者の犠牲は偶然性によって運命を翻弄された結果であり，その死は意味のない「無駄死に」とされることが多い。受動性／能動性の比重に応じて次のような犠牲者像が序列化されることでき，「英雄・英霊」が能動的犠牲者のもっとも高位に位置づけられるだろう。

＜能動・必然性＞←英雄・英霊／殉教者／生贄・スケープゴート／受難者／被害者・罹災者→＜受動・偶然性＞

西ドイツは，西側国家の一員として再軍備を決定し，軍隊を有する国民国家として体制を固めていくなかで，第二次大戦の戦争犠牲者をsacrifice化する必要に迫られた。戦争を想定して軍隊をもつにいたったこの国家と社会は，この犠牲者をヒトラーの戦争に巻き込まれて偶然にも命を落とした受動的犠牲者としてではなく，祖国のためにみずから命を捧げた能動的犠牲者であると解釈することで，その犠牲を偶然性から必然性へと転換しようとしたのである。そのため，国防軍が闘った戦争が侵略戦争や人種絶滅戦争として解釈することは許されず，ヒトラーおよびその取巻きと国防軍，そして両者の戦争目的が明確に区分された。ヒトラーとナチスは戦争をイデオロギーと私欲のために自己目的化し，国防軍の兵士とその指導部はこの自己目的化の受動的犠牲者になりながら，祖国のために戦い，能動的犠牲者として倒れたとされたのである。悪い戦争を行っていたのはヒトラーと親衛隊であって，ドイツ国防軍は敵国軍と同じように「普通」の戦争を行っていたということになる。1995年に開始された展覧会『国防軍の犯罪展』が，国防軍もヒトラーの絶滅戦争に深く関与していたことを明らかにしようとしたときに，ドイツ社会に大きな衝撃をもたらしたことは，この二分法的な戦争解釈が

ドイツ社会で市民権を得ていたことを実証したといえよう(8)。

こうしてヒトラーとナチスは非国民化され，民族のための能動的犠牲者としての地位を失った。しかしそれに代わってその地位の頂点には，ヒトラー暗殺未遂事件の中心人物であるクラウス・フォン・シュタウフェンベルクや，この事件にかかわったとしてナチスから自殺を強要されたエルヴェン・ロンメルが「英雄」として立つことになった(9)。二人とも「反ナチス」や「反ヒトラー」であったかもしれないが，ヒトラーが始めた戦争には反対しておらず，むしろこの戦争に能動的に貢献し，戦傷という形でこの戦争の能動的な犠牲者になっている。

1950年代に数多くの戦争映画(10) が西ドイツで製作されているが，ここでも二分法的な戦争観が展開され，一般兵士もヒトラーの無謀な戦争遂行の受動的犠牲者であると同時に，この戦争自体に疑いを抱くことなく祖国のために身体と生命を犠牲にした能動的犠牲者として描かれている。このような映画のヒット作として『08/15』の三部作（54～55年），スターリングラード戦を描いた『犬よ，永遠に生きたいか』（邦題『壮烈第六軍！最後の戦線』，59年）があげられる。後者の物語では，主人公のヴィッセを含む一般兵士が絶望的な戦いで命を賭している一方で，ナチ的人物としてのビルクマンは私欲を追求することでこの兵士たちと対立し，絶体絶命の状況になると敵前逃亡を試み，味方の兵士から射殺されている。反戦映画として世界的に知られている『橋』（59年）でも，少年たちは大人たちの戦争に駆り出されて凄惨な死にいたっているが，彼らは絶望的な戦争にじつに勇壮に闘っている。

国民的な歴史観のなかで能動的犠牲者が歴史的主体として戦後も君臨したことは，ナチス時代の記憶に別の大きな影響を及ぼした。このことによって，ナチス時代の受動的犠牲者を想起する価値を見出すことが困難になったからである。ユダヤ人犠牲者の物語として製作された劇映画のヒット作はなく，たしかにアメリカ映画『アンネの日記』はドイツでもヒットしたが，この映画はナチスの迫害によって受動的犠牲者になっていく物語ではなく，迫害にもかかわらず前向きに生

(8) Vgl., Hamburger Institut für Sozialforschung (Hrsg.), *Eine Ausstellung und ihre Folgen. Zur Rezeption der Ausstellung >Vernichtungskrieg. Verbrechen der Wehrmacht 1941 bis 1944,* Hamburg, 1999.

(9) Vgl., Peter Steinbach, Widerstandsdiskussionen und Widerstandsforschung im Spannungsfeld politischer Entwicklungen, ders. *Widerstand im Widerstreit. Der Widerstand gegen den Nationalsozialismus in der Erinnerung der Deutschen.* Ausgewählte Studien, 2., wesentlich erweiterte Auflage, Paderborn / München / Wien / Zürich, 2001.

(10) 50年代における戦争映画に関しては，Bärbel Westermann, Nationale Identität im Spielfilm der fünfziger Jahre. Frankfurt am Main, 1990の第二章，Peter Reichel, Erfundene Erinnerung. Weltkrieg und Judenmord in Film und Theater, München / Wien, 2004の第一部 „Kriegsbilder der Nachkriegszeit“ を参照。

きた少女を主人公に据えており，しかもゲシュタポに捕らえられ，強制収容所で凄惨に死んでいく前に物語を終わらせている。ユダヤ人と同様に強制収容所で多くの犠牲を強いられたロマや同性愛者などは「犠牲者」として認められることさえ困難な状況のなかで，社会的にも，制度的にも差別を受けながら戦後を生きなければならなかった。

3　産業構造と歴史観の転換から「ホロコースト・モデル」へ

以上のような状況は1970年代後半から，とりわけ1980年代に大きく変化していくことになる。まず，資本主義社会は70年代に危機を迎えることによって，その後に大量生産・大量消費のフォーディズムからポスト・フォーディズムへと転換していくことになった(11)。まず，フォーディズムであるが，市場を組織に従属させることで市場原理が内包する偶然性を処理し，生産と消費を計算可能なものとして長期的な計画によって実行する体制であると定義しておこう。そのための組織形態が，ヒエラルヒーにもとづく命令－服従関係のコマンド・システムであり，そのさいに計算可能な生産者と消費者を形成するために，伝統的な生産様式はピューリタン的労働倫理によって規律化され，生活・余暇領域も合理化された。また，労働と生活・余暇の領域は，性分業にもとづく生産と再生産の活動領域として厳密に区分された。この体制の社会においては，パノプティコン的な一元的な空間構造によってコマンドが内在化され，外的な時間によって統制されている規律化された従順な身体が理想とされていたのである。この身体には，過去・現在・未来を有機的に結びつけて，遠い未来に設定された集団的な目的を達成するために現在と未来のあいだを計画によって組織していく時間観念が要求され，合理的に配置された一元的空間に適合し，公的時間以外は私的な親密空間に退去することが求められた。過去・現在・未来を必然性でつなぎ合わせ，歴史を構築していく能動的犠牲者としての国民的な主体は，まさにこの社会の「英雄」である。そして，強制収容所はこのような社会空間の暴力的なモデルであり，フォーディズムのこれらの原則に適合していないとみなされた集団が収容された。その意味でナチズムはフォーディズムの原則を暴力的に貫徹しようとした体制であるといえる。

これに対してポスト・フォーディズムでは，市場の偶然性が組織されるのではなく，逆に市場の要求にしたがって永続的に経営は再組織されていく――その意味で市場の偶然性が組織原理となっている。コマンド・システムの硬直性を打破して，市場の要求にフレキシブルに対応するポスト・フォーディズムの組織形態は「間接統制」と呼ばれている。ここにおいて組織は脱中心化され，命令－服従

(11)　以下に関しては，拙稿「ポスト・フォーディズムの時間・歴史意識――〈ホロコースト〉の誕生」『ゲシヒテ』第２号，(2009年)，８-10頁を参照。

関係のなかで行われていた労働力の業績への転換は被傭者に委ねられている。「被傭者」は「労働受取人（Arbeitnehmer）」というよりも，「受託者」（Auftragnehmer＝委託受取人）として，自身が労働を組織していかなければならない。つまり，自己管理が被傭社者の重要な能力として評価されることになる。そのような労働条件下で重要視された労働倫理が「コミュニケーション的労働倫理」である。ゲアハルト・シュミットヒェンは48年に『ツァイト』紙で，時間厳守や勤勉，無言実行のような「ピューリタン的美徳」と並んで，チームワークや意見表明，協調性，ユーモアなどを特徴とする「コミュニケーション的美徳」の新しい労働モラルが誕生しており，このモラルが新しい労働条件において不可欠であることを指摘している。

以上を特徴とするポスト・フォーディズム体制の「管理社会」にとって，フォーディズムの組織形態と身体はもはや桎梏と化していった。労働と生活の境界線をまたぎ，多元的なライフ・スタイルを実現しうる空間が形成され，時間の管理機関となった人格――個人が外在化された時間の偶然性にそのつどフレキシブルに対応していく現在志向の時間観念が抱かれていったのである。それにともなって，ナチズムが資本主義的な近代社会と国民国家の危機に対して提示した強制収容所をモデルとする全体主義的な処方箋はリアリティと魅力を喪失していった。

この変化とともに歴史意識も変化し，過去・現在・未来を必然性でつなぎ合わせて歴史を能動的に構築していく能動的犠牲者の英雄物語によって国民形成をめざす歴史意識も魅力を失っていった。ポスト・モダン論者のいう「大きな物語」喪失は，まさにこのような時間・歴史意識の産物であるといえよう。いまや偶然の連鎖として意識された時間の持ち主は，必然性によってつなぎあわされた歴史にむしろ恣意性の臭いを嗅ぎだした。歴史は人間によって能動的に構築されるというよりも，むしろ外在化された存在として人間を翻弄するものとして感知され，能動的犠牲者によって創り出されていった歴史に翻弄された「受動的犠牲者」に共感が寄せられるようになったのである。つまり，フォーディズム体制の規律社会からポスト・フォーディズム体制の管理社会へと移行するなかで，国民的な歴史的主体はパノプティコンによって形成された能動的犠牲者から，強制収容所を通して生み出される受動的犠牲者へと交代していった。

この「受動的犠牲者」の歴史的モデルとなったのがホロコースト犠牲者であった。78年にアメリカで，翌年にドイツで放映されたテレビ・ドラマ『ホロコースト』は能動的犠牲者（ユダヤ人一家の次男）だけではなく，受動的犠牲者（母，娘）も主役に据え，この受動的犠牲者に自己同一化する物語を展開したことで大きな話題を呼んだが，このような映画が大量に製作されるきっかけを与えたのは，スピルバーグ監督の『シンドラーのリスト』であった。この映画ではホロコーストにおける受動的犠牲の姿が「リアル」に描き出されると同時に，戦争受益者のナ

チス党員であったドイツ人企業家がユダヤ人を救済するという物語が展開されている。ここではヘーゲルのいう「世界史的個人」が，歴史的使命を果たしていく能動的犠牲者から，この歴史的使命によって踏み潰された受動的犠牲者の救済者へと変化していったことが表現されていた。それ以降，『ベント』(97年)，『ライフ・イズ・ビューティフル』(99年)，『聖なる嘘つき／そのジェイコブ』(99年)から，『アンネ・フランク』(01年)，『戦場のピアニスト』(02年)，『灰の記憶』(02年)，『縞模様のパジャマの少年』(08年)，『アンネの追憶』(09年)，『ソハの地下水道』(11年)，『ミケランジェロの暗号』(11年)，『サウルの息子』(15年）まで数多くのホロコースト映画が欧米で生み出され，「ホロコースト映画」がジャンルとして確立した。ドイツでも『ヒトラーの追跡』(05年）や『アウシュヴィッツ行き最終列車』(06年)，『ヒトラーの旋律』(06年)，『ヒトラーの偽札』(07年)などのホロコースト映画が製作されているが，このことはドイツでもホロコーストが抑圧や忘却がなされることなくなり，積極的にこの歴史が想起されるようになったことを意味する。

こうして歴史的想起の「ホロコースト・モデル」が確立していった。それは，受動的犠牲者が生殺与奪の権を握られて，あらゆる権利を剥奪された例外状態のなかで展開する死・抵抗・生存戦術・脱出・逃走・潜伏などの物語，そしてこの犠牲者を救済する物語として歴史を想起していくモデルである。かつてパノプティコンとしての強制収容所によって生み出された規律化された能動的犠牲者が占めていた歴史的想起の主役の座に，「剥き出しの生」(ベンヤミン／アガンベン)として絶滅収容所が排出する受動的犠牲者とその救済者が君臨することになった。

4　ドイツ人の受動的犠牲の物語から，ヒトラーの「弔い」としての『ヒトラー～最期の12日間～』へ

1960年代以降になってドイツ人は，ナチス時代の過去を加害者として語ることが多くなり，被害者であることを主張するとナチズムの責任を相対化しているとのそしりを受けかねなくなった。しかし，産業構造の変化にともなって受動的犠牲者が国民的な歴史的主体として認められ，「ホロコースト・モデル」が受容されることで，その過去を受動的犠牲者として語ることができるようになった。そのような物語が展開されている映画として，戦争犠牲者では『スターリングラード』(93年）や『ジェネレーション・ウォー』(13年)，空襲犠牲者では『ドレスデン，運命の日』(06年)，東部からの故郷被追放の犠牲者では『逃避』(07年）と『シップ・オブ・ノーリターン』(08年)，ソ連兵によるレイプの犠牲者では『ベルリン陥落1945』(08年)，戦争とホロコーストのトラウマ犠牲者では『さよなら，アドルフ』(12年）などがあげられる。さらに，以前は能動的犠牲者として描かれていた反ナチ抵抗者の物語もその主題は，戦争の破滅へと引きずり込んだヒト

ラーからのドイツを解放することから，ヒトラーとナチスによる受動的犠牲者を救済することへと変化していくことになる。たとえば，『オペレーション・ワーレキューレ』(03年）や『白バラの祈り』(05年)，『ロンメル～第3帝国最後の英雄～』(12年）では，ホロコースト犠牲者を救済することがヒトラー暗殺計画や反ナチ抵抗運動の動機として語られているのである。

このような変化のなかで05年にヒトラーを主役に立て，その役をブルーノ・ガンツという高名な俳優に演じさせた映画『ヒトラー～最期の12日間～』が公開された。原題は没落，破滅，滅亡などを意味する „Der Untergang“ である。邦題が示しているようにこの映画は，ヒトラーのいる帝国宰相官房の地下壕に迫るなかで彼が自殺し，無条件降伏が受諾されるまでの第三帝国の最期の日々を描いている。その舞台はヒトラーらのナチ幹部がその日々を過ごす地下壕と，この地下壕の主を守るために市街戦が行われたベルリン市内であり，この内部と外部の二つの世界はそれぞれ一人の人物の視点から写しだされている。地下壕で「最期の12日間」を見つめていたのは，当時のヒトラーの若い秘書であったトラウデル・ユンゲであり，彼女の回顧録『私はヒトラーの秘書だった』はこの映画の原作の一つとなっている。一方，ベルリンでの敗戦を見とどけることになったのは，ヒトラー最後の映像で勲章を授与されていた少年をモデルとするペーターである。つまりこの映画はいわば「女子供」の視点から描かれた第三帝国「最期の12日間」であるということになる。

この映画の特質の一つは，ヒトラーが主役となっているだけではなく，この主役が怪物や悪魔としてではなく，もちろん英雄や聖人としてでもなく，人間ヒトラーとして演じられたことにある。このヒトラーは料理人の腕前を優しくほめたたえ，秘書には父親のように接し，人目を気にすることなく愛人エファ・ブラウンへの愛情を表現する一方で，そのエファの懇願を無視して彼女の義弟の処刑を断行し，部下を無能呼ばわりして激しく怒り，ドイツ市民の犠牲を一顧だにしない命令を下していくのである。あたかもヒトラー個人の私情によってすべてが決定されていったかのように地下壕の様子が描かれ，ナチ党という組織とも，ナチズムというイデオロギーとも無関係に，ドイツ民族の運命はヒトラーの恣意性と偶然性にゆだねられていたことが，この映画で示されている。そして，軍事的劣性のなかで赤軍の首都攻略はもはや時間の問題となっているにもかかわらず，ヒトラーは無条件降伏を拒否し，最後の一兵，一市民になるまで抗戦することを命じ，ベルリン市民に事実上の死刑判決を下していく。そのため首都防衛に駆り出された多くの市民が敗戦間近にして赤軍の攻撃にさらされ，次々に倒れていくだけではなく，逃走しようとする市民がヒトラーの下手人によって街頭に吊るされていくなど，そこには一種の「例外状態」が出現していく。そのあいだにヒトラーは，エファと結婚式を執り行い，苦痛のない自殺の方法の助言を受け，死後

に辱めを受けないように自らの遺体を処置するように命じているのである。

以上から，この映画では「ホロコースト・モデル」が適用されていることが理解されるであろう。絶望的な状態に置かれたベルリン市民によって表象＝代表されたドイツ国民は，生殺与奪の権をヒトラーに握られた例外状態のなかで受動的犠牲者として，比較的政治的負荷の少ない「女子供」の視線から記憶されているからである。そしてホロコースト犠牲者と類似した「受動的犠牲者」の地位を得ることができたドイツ国民は，その犠牲をもたらしたヒトラーの死を再現することで彼をようやく「弔う」ことができた。映画監督のヴィム・ヴェンダースは，この映画で多くのベルリン市民の死に様が描写されたのに，ヒトラーの死がドアの背後で行われて，「ブタ野郎がついに死ぬことが映し出されていない」ことは彼の死を威厳あるものにし，彼を神話的人物に仕立て上げていると怒った(12) が，これに対する社会学者のヤン・ヴェヤントの反論は説得力をもっている。銃弾でゆがんだヒトラーの死に顔がスクリーンに映し出されたならば，彼の死はベルリン市民の死と同じように同情を呼び起こしかねず，そのときにヒトラーは加害者であるだけではなく，自らの追求した破壊的願望の犠牲者としてイメージされてしまうというのである(13)。このようにヒトラーとベルリン市民とのあいだの境をあいまいにすることは「ホロコースト・モデル」による想起にとって決定的な瑕疵となりかねない。つまりこの映画では，ドイツ国民はホロコースト犠牲者に類するヒトラーの受動的犠牲者なのであって，ヒトラーはそれとは異なる死のありかた――ベルリン市民のような悲痛な死ではなく，苦痛を限りなく軽減しようとした姑息な死――を通して「弔われ」なければならなかった。

しかしこの映画では，1950年代の戦争映画のようにヒトラーおよびナチスとドイツ国民を加害者と犠牲者に峻別する二分法は取られていないようである。ペーターはヒトラー・ユーゲントとしてヒトラーを盲信して親と対立しており，トラウデルはヒトラーの秘書であったから政治的に無辜ではありえない。実際に，映画の最後に本人が60年後の姿であらわれ，ヒトラーの秘書になったことを若気の至りであったと弁明することはできないと，その責任を告白している。また映画の物語のなかでも，地下壕に呼び出された医師に付き添った看護師は，ヒトラーの前で泣き崩れ，ドイツ民族を導くよう懇願し，彼に従うことを誓っている。あるいは，帝都の防衛に駆り出された「国民突撃隊」を撤収する懇願に対してゲッベルスは，私たちはドイツ民族を強制したことはなく，この民族はその運命を自

(12) Wim Wenders, „Tja, dann wollen wir mal, Warum darf man Hitler in ‚Der Untergang' nicht sterben sehen?", *Die Zeit* 21. 10. 2004.

(13) Jan Weyand, So war es! Zur Konstruktion eines nationalen Opfermythos im Spielfilm „Der Untergang", Willi Bischof, (Hrsg.), Filmri:ss. Studien über den Film ‚Der Untergang', Münster, 2005.

ら選択して私たちに委託したのであって，その首が切られても自業自得だと答えて，拒否している。したがって「弔われていた」のはヒトラーだけではなく，悪魔でも怪物でもない人間としてのヒトラーを盲信したドイツ民族でもあったといえよう。この映画はまさに，ヒトラーによって表象されたドイツ民族の „Untergang" ＝没落の姿を描いていたといえよう。

ジャーナリストのフランク・シルマッハーは，この映画の脚本と製作を担当したベルント・アイヒンガーが以前は誰も成功しなかったこと，すなわちヒトラーの「第二の発明」を行ったと讃えた(14)。この「発明」によってはじめて，ヒトラーを彼が私たちに指示したものとは別の脈絡のなかに据えることが可能になり，こうしてヒトラーは「制御可能」になったのだという。これはまさに「弔い」の効果であるといえよう。この映画はヒトラーを歴史的人物として「成仏」させることで，彼をもはや勝手に「化けて出る」ことがない「制御可能」な存在にしたのである。そしてこの映画の物語は，地下壕を抜け出したトラウデルがペーターとともに廃墟と化したベルリン市街を抜け出すシーンで締めくくられているが，それは「弔い」が終わってヒトラーとその民族から自由になった戦後ドイツ国民の姿を象徴している。

5　「弔い」のなかでの社会変化とヒトラーの帰還

「弔い」によってヒトラーが「制御可能」になった結果，この歴史的人物を笑いの対象にすることも可能になった。フロイトによれば，カリカチュアやパロディは「権威や尊敬を要求する，なんらかの意味で高くそびえた〔崇高な〕人物や対象に向けられ」，それは Herabsetzung（引き下げること，非難や攻撃をすること）の手続きであるという。カリカチュアは「崇高な対象の全体的印象から一つのそれ自身として滑稽な特徴をきわ立たせることによって，その対象を引き下ろす」が，そこでは「崇高なるものの存在がわれわれを尊崇的な気分に固定させていない」ことが条件となる。一方，パロディは「よく知られている人物の性格と彼らの行動とのあいだの統一性を破壊し，その崇高な人物なり言葉なりを低俗なものに置き換える」のだという(15)。つまり，「引き下げ」の対象であるプレテクストを，ほんらいモデル化（模範化，形式化など）されていたものとは異なるデフォルメされた現実として再現することによって外部から茶化して侮蔑する偶像破壊の行為がカリカチュアだとすれば，パロディは真似ることでプレテクストに二重のコードを共存させ，その統一されている内容にズレを生じさせる笑いの技

(14)　Frank Schirrmacher, „Die zweite Erfindung des Adolf Hitler", *Frankfurter Allgemeine Zeitung* 15. 9. 2004.

(15)　ジグムント・フロイト「機知――その無意識との関係――」『フロイト著作集 4』（人文書院，1983年），391～2 頁。さらにリンダ・ハッチオン（辻麻子訳）『パロディの理論』（未来社，1993年）も参照。

法であるといえる。パロディ化されたテクストはプレテクストのモデルに依存しているため，後者は前者よりも価値的に上位に位置づけられることが多く，ここからパロディは「引き下げ」だけを行うわけではないことが理解できよう。

チャップリンが『独裁者』でヒトラーの演説やナチス式あいさつをデフォルメしてヒトラーを「引き下ろした」手法はカリカチュアにあたるであろう。このような映画は，恐慌を克服したヒトラーの人気が少なくともドイツ国内で絶大だったころにハリウッドという外部でイギリス人によって製作されたから可能だったといえるだろう。実際に，ホロコーストの実体が暴露されたのちに第二次世界大戦の首謀者であった独裁者をパロディの対象にすることは困難だった。たしかに，戦後も残存したヒトラー崇拝やナチズム肯定論者に対してカリカチュアでその偶像を破壊することや，ヒトラーとナチズムの性格と行動の不統一を笑いの手法をとらずに「暴露」することは比較的容易であった。しかしヒトラーをパロディの対象とすることは結果として，彼が「引き下ろし」を必要とする「高くそびえた〔崇高な〕人物」であることを認めることになるだけではなく，そのパロディがヒトラーのモデルに依存してしまうため，「笑いごと」で済まされなかったのである。

しかし「弔い」によってヒトラーがもはや「化けて出る」ことがなくなったのちに状況は変化した。たとえば，戦争末期に心を病んでいったヒトラーがユダヤ人の俳優に精神的に寄りかかっていくという，ヒトラー個人をパロディの対象とするドイツ映画『我が教え子，ヒトラー』が07年に製作されている。また，ヒトラーが生身の人間として現代に蘇生し，お笑い芸人として人気を博すという小説『帰ってきたヒトラー』(16) が12年に刊行され，ベストセラーとなったことも，「弔い」後の現象であるといえる。この小説では，蘇ったヒトラーは当時の思想信条をそのまま語るのだが，その言動はギャグとして受け取られているため，ネオナチではなく，お笑い芸人とみなされてしまっているからである。なぜヒトラーの言動はギャグになってしまうのか，フロイトの説にもう一度耳を傾けよう。

> あまりにもよく似た二つの顔を見るとき，人は同一の型からとられた二つの複製，あるいはメカニズムで産出される同一の手続きを思い浮かべる。要するに，笑いの原因はこれらの場合，生あるものが生なきもののほうへ近寄ってしまうことであろう。われわれはこれを，生あるものの生なきものへの引き下げということができよう(17)。

小説では本人以外の登場人物からヒトラーは「ものまね」を行っている「そっくりさん」と思われているため，まねをされたヒトラーが「生なきもの」に引き

(16) ティムール・ヴェルメシュ（森内薫訳）『帰ってきたヒトラー（上・下）』（河出書房新社，2014年。）

(17) フロイト「機知――その無意識との関係――」398頁。

下げられたと感受されて，そこに笑いが生じている。しかしそれは同時にヒトラーが「生あるもの」であることを前提としているから，「弔い」の前にそのように笑いを誘うことはヒトラーを「化けて出させる」ことになりかねなかった。しかし「弔い」のあとに「統御可能」になったこのヒトラーの言動は，政治的危険性をはらみながらもジョークの枠組みに収まることができ，ヒトラーの思想の脈絡から離れた解釈や，現代社会の脈絡に沿った解釈を生み出していく。たとえば，現代社会がヒトラーの価値観によって評価される――たとえば，アーリア人の創造物としてコンピューターとインターネットの政治的価値がヒトラーから賞賛される――とき，ヒトラーと同時に現代社会も笑いの対象として「引き下げ」が行われているように，ヒトラーの言動はナチズムの脈絡から離れて現代社会への批判として解釈されることが可能になっている。この物語では，ヒトラーはネオナチからドイツを侮辱する「ユダヤのブタ」となじられて襲撃され，そのために極右的暴力の犠牲者として左翼政党から持ち上げられてしまうのである。ただ，小説のなかのヒトラーは反ユダヤ主義の思想を抱きつづけているものの，それをネタとすることは禁じられ，彼もそれに同意している。小説でこのネタが語られないのは，ヒトラーの蘇生を可能にした「ホロコースト・モデル」の原則にそれが抵触するからだろう。

しかし，この小説が15年に映画化されると，それは小説とは大きく異なる内容と意味をもってしまった。小説とは異なり，映画ではヒトラーはドイツ各地を旅しており，台本なしで市井のドイツ人や右翼政治家が撮影中のヒトラーと語り合っているシーンが主要な要素となっている。たしかにユダヤ人ネタの禁止は映画でも守られているが，そのシーンでは当時の思想信条を吐露するヒトラーの発言が，ギャグやブラック・ユーモアとしてではなく，彼の政治思想の脈絡のなかで同意あるいは共感されている場面が何度か登場するのである。このような変化には，小説が執筆されていた時期からその映画化にいたるあいだに社会情勢が先鋭化したことがかかわっていると考えられる。

この先鋭化として，まず移民をめぐる問題があげられる。1950年代から外国人労働力が西ドイツに導入され，60年代以降にトルコ系人口が急増していくが，当初はナチス期と同様の「外国人労働者（Fremdarbeiter）」概念が使用されていたこの移民は，客人として丁重に扱うべきであるが，いつかは帰っていく移民ではない存在として「ガスト・アルバイター」と呼ばれていくようになる。しかし家族が呼び寄せられ，二世，三世が成長していく現実とこの概念のあいだに齟齬が生じてくると，「外国人」や「トルコ人」といった国籍の異なることを示す概念が使用されるようになった(18)。ところが，国籍法が改正されて，帰化する移民が

(18) Vgl., Martin Wengeler, „Multikulturelle Gesellschaft oder Ausländer raus? Der sprachli-

増加していくにしたがって，また2001年の同時多発テロ以降，とくに04年にオランダで映画監督のテオ・ファン・ゴッホがイスラーム主義者に殺害される事件が起き，宗教間の対立が激化していくと，国籍ではなく，宗教と文化の相違を通して移民とその背景をもつ人びとを多数派社会から区別する概念として「ムスリム」が多用されるようになっていく。こうして移民問題は経済的事情や国籍ではなく，宗教と文化の問題として語られるようになった。換言すれば，移民問題はエスニック化されたのである。

さらに人口問題(19) も指摘しなければならない。とくに2000年に国連人口調査報告が公表されて以来，人口の少子高齢化によって国家と社会の屋台骨が揺らぎかねないことが指摘され，メディアでも「子供よ，子供！――ドイツ人の数は急激に低下する」(『ツァイト』紙00年8月10日号)，「私たちはますます少なくなる」(『ヴェルト』紙01年3月9日号)，「だまされた家族――人口動態の精神攪乱：政府は子供を忘れた」(『ツァイト』紙01年2月1日号)，「爆弾がカチカチなっている……――だが政治家は闘おうとしていない。高齢化社会は社会システムを爆破する」(『ツァイト』紙02年12月27日号)，「人のいない国」(『ツァイト』紙03年1月2日号)，「笑い声なき国」(『シュピーゲル』誌04年1月5日号)，「子供をよこせ！――その名に値する近代的人口政策の薦め」(『ツァイト』紙04年3月4日号）といった見出しが飛び交うようになった。『シュピーゲル』誌の00年10月23日号は，現在の人口を維持するためには年間32万人以上，就労年齢層を安定保持させるためには年間45万人以上の移民を毎年，2050年まで受け入れなければならないという算定を「民族なき空間」という表題の記事で行っている。こうして，移民の大量導入は経済的要因だけではなく，福祉社会を維持しうる勤労人口の保持という理由からも議論されるようになったが，その代替案としてドイツ人の出生数を増加させるべきであることが提唱されるようになった。たとえば，2000年にシュレーダー政権が知的労働者の移住を促すために「グリーンカード制」を導入しようとしたときに，CDUの州議会選挙で「インド人ではなく，子供を」のスローガンが使用され，またポピュリズム政党のAfD（ドイツのための選択肢）は16年の綱領で「大量移住ではなく，もっと子供を」を訴えている。ドイツ連邦銀行の理事であったティロ・ザラツィンが09年からこの問題に関する議論を人種主義的な言説を用いながら展開すると，激しい議論が巻き起こり，彼は「時の人」となった。

---

che Umgang mit der Einwanderung seit 1945", Georg Stötzel / Martin Wengeler / Karin Böke, *Kontroverse Begriffe. Geschichte des öffentlichen Sprachgebrauchs in der Bundesrepublik Deutschland,* Berlin, 1995.

(19) Vgl., Christoph Butterwegge, „Stirbt „deutsche Volk" aus? - Wie die politische Mitte im Demografie-Diskurs nach rechts rückt", ders. u.a., *Themen der Rechten - Themen der Mitte. Zuwanderung, demografischer Wandel und Nationalbewusstsein,* Opladen, 2002.

こうして旧来のドイツ国民の保持は困難となり，その再編成が不可避となり，この再編成――人口の質的・量的保持・形成――をめぐって「生政治（Biopolitik）」が営まれることになった。この政治において移民と人口動態の問題がエスニック化され，人種主義的な言説が幅を利かすようになった状況のなかで，『帰ってきたヒトラー』は映画化されることになったのである。もちろんこの映画は人種主義的な言説を流布することを目的としていない。むしろこの映画は，ヒトラーに「似せる」（＝同意，共感させる）ことで，2010年代のドイツ社会を「引き下げ」ようとしている。この役割を担うべく，ヒトラーはスクリーンのなかに「帰ってきた」のである。

最後に――ドイツ国民の再編成と「恐れるドイツ」

映画『帰ってきたヒトラー』のラストシーンは，オープンカーに乗ったヒトラーに多くの市民がナチス式にあいさつし，ドレスデンの市民運動「ペギーダ」のデモが „Wir sind das Volk“ と叫ぶシーンを映し出している。このペギーダのデモで掲げられたプラカードには「明日メッカに跪くよりも，今日ペギーダへと頭をあげよ」や「2035年に私たちはマイノリティだ」，「1989年に私たちは国民だ（Wir sind das Volk!），2014年に私たちはまだ国民だ（Wir sind noch das Volk!），2039年に私たちは国民だった（Wir waren das Volk）」といったメッセージが書かれていた(20)。ここにはドイツ国民が変容していく「恐れ」が表明されているといえよう。その払しょくのために，社会問題を宗教や文化のカテゴリーによってエスニック化することでマイノリティを排除しようとする戦術がとられているのである。シュミット元首相が少子高齢化問題に関して寄せたコメントは，この「恐れ」の背後に潜む問題の本質を暗示しているように思われる。

> 私たちの社会の健全な年齢構成を再構築するために数十年が必要とされるであろう。それにもかかわらずここに――恒常的に収縮し，恒常的に高齢化していく私たちの社会に直面して――もっとも重要な長期的な課題がある！　この場合に問題となっているのは，未来の年金の受給可能性だけではなく，まったく根本的にいえば，国民の生命力と創造力の喪失の危険性が予測されうることなのである――この喪失は福祉国家の機能不全よりも重要であるかもしれない。この問題で考えを根本的に改め，方向転換することが国民的課題である(21)。

『帰ってきたヒトラー』は，国民の構造的な再編成のなかで立てられたこの「国民的課題」に取り組んでいるドイツ社会をドキュメントした「笑えない」映画となったのである。

---

(20)　拙稿「ドイツ極右主義――時間／空間の構造的変動と多文化社会――」『立命館言語文化研究』28巻4号，（2017年），220頁。

(21)　Helmut Schmidt, „Alle müssen länger arbeiten. Die Rentenreform genügt für die kommenden Jahre, aber nicht auf Dauer“, Die Zeit 4. 1. 2001.